OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第36号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

教育学部1年

宇津木美都 パラ代表決定

水上競技

学部生初

夢は金メダルと小学校教員

目指す。

感じたい初出場。住幅広会連パラ代表となる陸上走り幅跳びの山本篤・本学客員准教授（新日本住設）以来2人目となる。学部生としては初だ。「東京大会では、パラリンピックでしか味わえないような緊張感や雰囲気を体感したい」。100㍍平泳ぎで決勝進出を目指す。

宇津木美都パラリンピックへの道のり

宇津木は5月21～23日にあったジャパンパラ大会の100㍍平泳ぎ（SB8クラス＝四肢の一つの一部欠損など）予選で世界ランキング10位に相当する1分30秒07をマーク。6月にドイツで行われた障害の国際クラス分け検査で出場資格を満たし、正式に代表入りが決まった。

3歳から水泳を始めた。京都市立洛北中学入学後、本格的に競泳に取り組み、2017年パラ競泳日本選手権50㍍平泳ぎでアジア新記録、2018年アジアパラ大会100㍍平泳ぎで金。「中学では普通の水泳部員だったのが、入部1年も経たずにパラ水泳に関わると突然、全国の育成合宿に呼ばれた。『世界を狙える』と言われて驚いたけれど、自己ベストを出すことが、ただ楽しかった」という。

しかし、京都文教高校1年の時、2019年世界選手権に出て東京パラリンピックの代表権を獲得することを狙っていた。その道が途絶えた後、タイムはどんどん落ち、中1のころの記録に。もう、平泳ぎを泳ぐのが嫌と思う時もあった」。挫折感を味わった。

しかし、周囲からのアドバイスで水の抵抗を減らすため最小限のストロークに変えて復調の手ごたえをつかむ。そして、小学校の教員になる夢の実現と競泳の両立を果たすために今春、教育学部に入学した。

大学の練習では、新型コロナウイルスの影響はあるが、室内プールやウエートトレーニングで質の高いメニューをこなせているという。自炊など下宿での一人暮らしにも慣れた。

ジャパンパラ大会で出した100㍍平泳ぎの1分30秒07は、それまでこの2年間ではベストのタイムで、100㍍背泳ぎも自己ベストだった。「やっとここまで戻ってきたかなという感じ。東京大会では100㍍平泳ぎと200㍍個人メドレーの出場になると思うので、2種目とも強化したい」と意気込む。

憧れだった山本客員准教授と先日、大学のS&Cルームで対談した。山本から「東京大会の1年延期で、学生時代に東京、2024年パリと2大会に出る機会がある」と励まされ、「チャンスだと思っている。30歳まで競技を続け、パラリンピックで金メダルを取りたい」と夢を広げた。

金メダルと、小学校の教壇。東京パラリンピックは2つの夢をかなえるスタート台となる。

大阪体育大学は東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会へ12名の代表選手・スタッフを送り出しました!

＜オリンピック＞

【男子サッカー】	林　大地	サガン鳥栖／体育学部 55 期生
【男子ハンドボール】	成田幸平	湧永製薬／体育学部 47 期生
【女子ハンドボール】	田邉夕貴	北國銀行／体育学部 47 期生
	角南　唯	北國銀行／体育学部 49 期生
	大山真奈	北國銀行／体育学部 50 期生
	角南果帆	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング／体育学部 50 期生
	佐々木春乃	北國銀行／体育学部 52 期生
	近藤万春	イズミメイプルレッズ／体育学部 53 期生
【男子柔道・コーチ】	生田秀和	体育学部准教授

＜パラリンピック＞

【女子競泳】	宇津木美都	教育学部１年
【男子陸上】	山本　篤	体育学部 40 期生／客員准教授
【ボッチャ・コーチ】	曽根裕二	教育学部准教授

教育学部

曽根准教授 東京パラコーチに

教育学部の曽根裕二准教授（アダプテッド・スポーツ）が東京パラリンピックのボッチャコーチに選出された。

曽根准教授はBC4（非脳原性疾患）クラスを担当。個人戦とペア戦に臨む。7月末の合宿の後、8月中旬から大会終了まで代表チームに帯同する予定だ。

2015年からボッチャの日本代表コーチを務め、2018年の世界選手権、アジアパラゲームズなどに参加。東京大会が初のパラリンピックとなる。

曽根准教授は本学でアダプテッド・スポーツクラブの部長を務め、ボッチャを含む多様なパラスポーツを指導。スポーツ庁の「ジャパン・ライジング・スター・プロジェクト」1期生で2024年パリ大会でのボッチャ日本代表を目指す内田峻介さん（教育学部1年）らも指導している。

東京パラリンピックに向けて、「大会はコロナ禍の影響が心配されるが、どんな状況になってもできることをしっかりやり、選手がベストを尽くせるようにサポートしたい」と抱負を話している。

柔道部男子

生田監督 東京五輪コーチに

柔道部男子監督の生田（しょうだ）秀和准教授が東京オリンピックで柔道男子日本代表のコーチを務めた。

ナショナルトレーニングセンターに常駐し、その日に試合がない重量級の選手を中心に指導した。

生田監督は神奈川・桐蔭学園高、筑波大、ALSOKで選手、コーチを務め、2013年から全日本柔道連盟ジュニア強化コーチ。2016年リオデジャネイロ五輪後はジュニアの指導も務める。

2018年のアジア大会（インドネシア）でもコーチを務め、これまで世界規模のスポーツ競技会で優秀な成績を収めた選手や指導で特に貢献があった指導者に贈られる文部科学大臣賞を5回受賞した。

2019年4月、本学の准教授に就任。柔道部男子監督を務める。

五輪でのコーチは初となる。

生田監督は五輪に向けて「一生に一度あるかないかの五輪に加えて自国開催でもあり、プレッシャーがかかる中で選手が力を出せるよう、調整会場での雰囲気づくりに努めてサポートしていきたい」と抱負を語っていた。

サッカー男子

「一味同心」逆境をプラスに 心をひとつに

タレント軍団から総合力で勝負するチームへ

サッカー部男子は関西学生サッカー選手権大会で4強に進出し、11大会連続26回目の総理大臣杯全日本大学サッカートーナメントへの出場を決めた。チームの目標は総理大臣杯とインカレでの日本一、さらに関西学生リーグ4連覇だ。

昨年のチームはGKをはじめDFと守備的MFの6人が卒業後にJリーグ入団をしたタレント軍団。強力な守備陣を誇り、失点が少ないことがチームの特長だった。しかし、主将のDF小川大空（4年）は「今年は1年生から4年生までが力を合わせて総合力で勝負するチーム。一致団結して戦う必要がある」と話す。

チームのスローガンは「一味同心」。同じ目的の下に力を合わせ、心を一つにするという意味だ。小川は「サッカーで日本一を目指すことだけでなく、サッカー以外の部分、日常生活での所作でも、周りに評価され応援したくなるようなチーム創りを目指している」と説明する。

注目選手は、フィジカルの強さを生かし得点を量産するFW高橋一輝（4年）、エースナンバーである10番を背負い攻守にわたって活躍するMF野寄和哉（3年）の2人。東京オリンピックで活躍するU―24日本代表の林大地（サガン鳥栖、体育学部55期生）の後継者としてチームを引っ張る。1年生ながら中心選手として活躍する吉岡直輝（1年）は、将来の田中駿汰（コンサドーレ札幌、体育学部55期生）のような選手にと期待されている。

リーグ戦中盤で、守り切れない試合が続きフラストレーションが溜まりつつあった中で迎えた京都産業大学戦は、先制されながらもFW高橋一輝の得点で逆転勝利を収めた。チームのリズムを取り戻すきっかけとなった試合だと副将泉森涼太（4年）は振り返る。

福島充コーチは「多くのメンバーに経験を積ませ、メンバーの一人ひとりが成長していけるように心がけている。様々な状況をプラスに変えていき、今後に活かすようチャレンジしていく」とより強く、魅力的なチーム作りを目指す。

泉森涼太（4年）　野寄和哉（3年）　横山翔大（3年）　小川大空主将（4年）　河村匠（3年）　高橋一輝（4年）

Photo by ©Nozomi FUJITA

サッカー女子

春季リーグ3位 秋へのチャレンジ始まる

サッカー部女子は関西学生女子サッカー春季リーグを3勝1敗2引き分けの3位で終えた。

リーグ戦は新型コロナウイルスの影響で、各チームによって実施できた試合数が異なるイレギュラーな状況に。順位は、従来の勝ち点ではなく勝ち点率によって決定されることになった。

7月18日の明治国際医療大学戦は、引き分け以上で春季リーグ優勝という状況で迎えた大一番だった。

チームは上向き 改善点を再認識

神門泰奈（3年）

試合は、序盤から相手に押し込まれる場面が多かったが、GK・津田明日翔（2年）のビッグセーブで相手に得点を許さない。素早いカウンターからチャンスメークし、加井菜月（2年）が豪快なシュートをゴールに突き刺して前半に先制点を奪った。

後半に入ると、相手が攻勢に転じる。主将の樋口佳那子（3年）を中心に落ち着いた守備を展開したが、オウンゴールと技ありのシュートを立て続けに決められ、1―2で試合終了。春季リーグは3位でフィニッシュとなった。

樋口は試合後、「内容としては悪くなかったが、点を取りきる力や抑えるところはしっかりと抑える力を、チームとして付ける必要があると再認識できた」と振り返った。

今シーズンのチームは下級生が多くメンバーに入っているが、新型コロナウイルス対策の影響でなかなかチーム全体の練習が行えなかったという。新入生が入学してからも練習試合などができていないため、チームに溶け込めない不安定な時期ができた。樋口は「試合ができるようになってからはチームの雰囲気も上向き、プレーや連携にもそれが表れてきている。最後のインカレで結果を残すための土台はできてきた」と前向きに話した。

石居宜子監督は「皇后杯の大阪府予選と並行してリーグ戦が行われているので、連戦となり疲れや暑さに対する難しさはあったが、頑張れた部分は多かった。この試合の失点も仕方のない部分があり、点を取りきることが重要だった。リーグを通して1年生から4年生まで多くの選手を起用するなどチャレンジできた部分も多くあった。インカレや秋季リーグに向けて練習や普段の取り組みからチームを見直したい」と秋以降を見据えた。

的場望香（3年）　樋口佳那子主将（3年）と津田明日翔（2年、左）　宮本春花（3年）

加藤未来（2年）　加井菜月（2年）

※各面とも、集合写真は撮影時のみマスクを外しました

硬式野球部男子

勝ちたい気持ちで守備力向上
阪神春季リーグ3位

大槻龍城外野手（3年）

硬式野球部男子は阪神大学野球春季リーグ（1部）で8勝3敗1引き分けで3位だった。

最終節、5月22、23日の甲南大学戦で連勝すれば、4季ぶりの優勝だったが、22日の試合で1―3で敗れた。それでも杉本壮志（3年）―阿吹俊介（3年）バッテリーの活躍など秋に向けて明るい材料もあった。市成啓悟主将（4年）、春季リーグ後引退にリーグ戦を振り返ってもらった。

「昨年秋は4位だったが、守備が崩れて不戦勝を除けば実質1勝。秋から春にかけチームは守備力などで成長し、最終節まで優勝争いに絡めた。ただ、もったいない試合を落としたのが響いた」。市成は手ごたえと反省を口にした。

春季リーグは神戸国際大学に3―0、2―0と2連続零封勝利でスタートした。

「もったいない」試合になったのは、4月18日に7―7で引き分けた大阪産業大学戦と、4月25日に4―5で敗れた追手門学院大学戦。市成は「両方勝てた試合」と振り返る。大阪産業大学戦は4―0とリードしていたが、雨による2度の中断などの影響で、安定感抜群だったエース杉本が崩れ、終盤に再逆転したが追いつかれた。追手門学院大学戦は先発の西村陸（3年）は力投したが、後続投手が打たれ、逆転サヨナラ負けした。

それでもチームを立て直し、上位校のコロナ禍による棄権などもあり、優勝争いに踏みとどまる。5月22、23日に甲南大に連勝すれば優勝が決まる位置につけた。

大一番の22日の甲南大学戦。大体大は序盤から押し気味に試合を進めたが、中軸に後一本が出ない。四回に失策で先制を許し、打線も相手エースに1点どまりで1―3で敗れる。ただ、最終戦は打線がつながり6―3で意地を見せた。

リーグ戦を通じた収穫は、まず左腕・杉本の安定。チェンジアップ、スライダーの精度が増し、制球も良く安定感が光った。また、捕手の阿吹は、昨秋は打撃で精彩を欠いたが今春は打撃で大きく向上したほか、配球、体を張ってワンバウンドを止める守備でも成長。昨秋は固定できなかった二遊間も中川健太郎（3年）、野上聖喜（2年）で固定。市成も3割4分台の打率に9盗塁で勝利に貢献。市成、阿吹、中川はベストナインに選ばれた。

一方で課題は中軸が湿りがちだったことと、伝統の機動力が十分に機能しなかったことだ。

チームは4年生の大半が引退し、大槻龍城（3年）新主将のもと、新チームが秋を目指している。

市成は大体大野球部のカラーについて「中野和彦監督の方針もあり、大体大では選手が自発的に練習する。自分たちが勝ちたいから練習を頑張り、だから元気があるチームになる」と話す。

全国大会の出場は2019年春の全日本大学選手権が最後で、舞台の神宮球場を経験したのは、4年が引退すれば3年生だけ。神宮の経験をチーム内で途切れさせないためにも秋、来春は重要なリーグ戦となる。

阿吹俊介捕手（3年）

位田遼介投手（3年）

中川健太郎二塁手（3年）

市成啓悟主将（4年）

主将、語る。

杉本壮志投手（3年）

硬式野球部女子

勝負の年、目指すは初優勝

立野歩佳投手（4年）

硬式野球部女子は7月に行われた全国大学女子硬式野球選手権高知大会で準優勝となった。悲願の初優勝を目指したが、決勝で守備が乱れて環太平洋大学に2―4で敗れた。チームは8月の全日本選手権大会、9月の全国大学女子硬式野球選手権での雪辱を誓う。

今年は勝負の年だ。昨秋の全国大学選手権で準優勝したメンバーがほとんど残った。投手陣はコントロールが良く変化球が多彩な立野歩佳（4年）、速球中心に組み立て、外のスライダーの制球がいい左川楓（2年）が2本柱。打線は女子プロ野球の京都フローラで3年間プレーし、今春、スポーツ科学を学びたいと入学した2番・白石美優（1年）の加入が大きい。4番の中村華月（3年）は外野の頭を超える長打力が備わった。

6月の関西女子硬式野球選手権ラッキートーナメント大会の決勝では、プロ野球の阪神タイガースが昨年末に創設したクラブチーム「阪神タイガースWomen」と対戦した。3―11で敗れたが、打線は、準決勝まで無失点のタイガース投手陣から3得点を挙げ、戸室知奈美（4年）と白石がそれぞれ二塁打を2本放ち、打線のスケールアップを感じさせた。

その後、迎えた大学選手権では、初戦は立野―左川の継投で桃山学院大学を2―1で降した。準決勝は1年生の内田陽菜のロングリリーフが成功し、至学館大学に4―2で逆転勝ちした。

しかし決勝は、1―1の三回、実質的に3失策が重なり、2失点。五回に白石の二塁打、山下陽夏（4年）の適時打で1点を返したが、及ばなかった。

横井光治監督は、1番から5番まで長打を打てる打者がそろい打ち勝ってきた半面、ロースコアでしのぎ合う経験が減ってもろさが出たとみる。

試合後、選手たちに「これが現実だ。優勝は簡単にはできない。この悔しさを次につなげてほしい」と奮起を促した。

全日本選手権、さらに9月の全国大学選手権で初優勝を達成するカギは、かつてのチームカラーに立ち返った、守りの野球だ。「もう一度守り抜く野球に立ち返る。アウトにできるプレーでは、確実にアウトを取る」。苦杯を糧に、悲願の初優勝に向けた練習にチーム一丸で取り組んでいる。

中村華月内野手（3年）

左川楓投手（2年）

弓削菜穂捕手（3年）

ピンチにもマウンドに集まり笑顔のナイン

繋がりだした挑戦の成果

濱口奏琉（1年）、山口侑輝（2年）、向江拓（1年）＝左から

レスリング

レスリング部は7月3、4日の西日本学生新人選手権大会で、濱口奏琉（1年）が男子グレコローマンスタイル63㌔級で優勝した。本学の選手が同選手権で優勝するのは姫路文博監督以来23年ぶりだ。

また、グレコローマンスタイル97㌔級で山口侑輝（2年）が3位、130㌔級で向江拓（1年）が3位。フリースタイル65㌔級でも濱口が2位、97㌔級で山口が2位、125㌔級で向江が3位に入った。

今回、入賞した選手はすべて大阪体育大学浪商高校の出身だった。

濱口は高校3年だった昨年から新型コロナウイルスの影響で試合が流れ、モチベーションが下がっていたという。

しかし、目標にしていた天皇杯全日本選手権につながる今大会の開催が決まり、自主性をもってトレーニングに取り組めた。

大会の最大の山場は1回戦。高校世代の日本代表だった選手に気持ちで上回り勝利できた。濱口は「天皇杯でも表彰台を狙っていく。格闘家としての最終目標は総合格闘技の最高峰であるUFC」と話した。

練習に励む濱口奏琉（1年）

レスリング部は昨年秋の西日本学生選手権大会でも前薗渓選手（現4年）がグレコローマンスタイルの67㌔級で、本学勢として20年ぶりに優勝。最近の好成績について、姫路監督は「スポーツ科学センターに『体重管理とアスリートとしての食事』のセミナーを開催してもらって減量に伴う試合中のパワーダウンがなくなったこと、いろいろな方のサポート、中高大が連携し練習をしてきたことが少しずつ成果につながっている」と分析している。

「ヘラクレス軍団」復活なるか。

主将、語る。

ラグビー

Bリーグに降格した昨年は、安藤栄次新ヘッドコーチを迎えてBリーグで優勝。しかし、コロナ禍を理由に入れ替え戦を実施せずAリーグ昇格の可能性がないことが早い段階で分かっており、モチベーションの維持が難しいシーズンだった。

今季もコロナ禍のため、グラウンド練習は2チーム、ウエートトレーニングは4チームに分かれ、チーム全体のミーティングが難しかった。吉田は「例年に比べてチームの一体感がつくれていない」と分析する。

今季の目標はもちろんAリーグ復帰だが、それにとどまらず、Aリーグの中位までチームの立ち位置を引き上げることだ。春までフィジカルの強化に取り組み、関西大学戦はスクラムなどコンタクトプレーでは圧倒できた。

吉田海主将（4年）

5～7月にかけて開催された関西大学春季トーナメントは、ラグビー部にとって悔しい結果となった。初戦は不戦勝だったが、関西学院大学に5－64、近畿大学に10－64で敗れ、7～8位決定戦でも関西大学に14－35で屈し、8位。吉田海主将（4年）は「自分たちの今の立ち位置が理解できた。関大とのトライ数の差を埋めていく夏にしたい」と巻き返しを誓う。

あと、Aリーグ復帰のために必要なことは、パスのスキルやゲームの流れを読む力の向上だ。日々の練習の中で、ディフェンスの強度などをどれだけ試合に近づけていけるかがカギとなる。

吉田は「主将として妥協はしない。A復帰は簡単ではないが、やるべきことをやれば達成できる目標だ」と意気込む。2006年には全国大学選手権で4強に進んだ「ヘラクレス軍団」。復活なるか。

主将、語る。

テニス

男子　テニス部は関西学生リーグ団体戦の入れ替え戦での敗退が続いている。中井彪雅主将（4年）は「今年こそ1部復帰を果たす」と誓う。

7月の関西学生春季トーナメントにはシングルス4人、ダブルス1組が出場した。

シングルスは村口皓亮（3年）、前田将吾（4年）、渡邊太一（4年）、北昇馬（1年）。ダブルスは前田・村口組だ。

チームの柱的な存在の前田、闘志を前面に出す村口、ディフェンスが巧みな渡邊、走ってボールを拾える北。彼らを中心に悲願を目指す。

昨年はコロナ禍でリーグ戦は中止。前回の入れ替え戦は2年前で、2部1位として関西学院大学と対戦した。中井は「いいメンバーがそろっていて、力は劣っていなかった」という。しかしふたを開けたら惨敗。ダブルス3試合をすべて失ったのが響いた。

その課題のダブルスは、ストロークが力強い前田・村口ペア以外も少しずつ地力をつけてきたという。

中井は「部活動なのだから、部員全員が同じ目標に向けて一丸にならないとチーム力はつかない。練習は人数制限でA～Dチームに分かれる場合もあるが、全員を同じ方向に向けることが主将の役割」。チームワークで悲願の1部復帰を狙う。

中井彪雅主将（4年）

女子　テニス部女子は現在、関西学生リーグで3部。鳥野銀主将（4年）は「リーグ戦でベストを尽くし2部昇格を目指す」と語る。

7月の関西学生春季トーナメントでは、シングルスで鳥野と岡井志織（3年）、ダブルスで岡井・上野胡桃（3年）組、前田明音（2年）・海津美空（1年）組が本戦に進んだ。

昨年に続き、今年も試合や練習はコロナ禍の影響を大きく受けている。

関西学生春季トーナメントは例年、5月開催だが、緊急事態宣言などの影響で2カ月も遅れた。

練習は人数制限があり、時間も週末は2時間半、朝練も1時間半だけと制約を受けた。鳥野は「今も部員全員と顔を合わすことができないのがつらい」と話す。ケガをした部員がちゃんと練習できているのか、みんながモチベーションを維持できているのか。主将として1人1人と接して確認すべきことができないのが、もどかしいという。

このため、ウェブ会議システムを使ったトレーニングを取り入れ、筋力トレーニングの動画を共有したり、パソコンのカメラで自分のフォームを撮影するなどの工夫に取り組んできた。鳥野は「オンラインでみんなでつながれば、苦しくても頑張ろうという気持ちになる」と話している。

鳥野銀主将（4年）

体操競技

主将、語る。

体操競技部にとっては、辛い春となった。4月の関西学生選手権大会、5月の西日本学生選手権大会がいずれもコロナ禍のため中止に。9月の全日本学生選手権はぶっつけ本番となる。

男子　上山剣童主将（4年）は「チーム状態が非常に良かっただけに、試合がなくなったのは残念」と悔しがった。

昨年のインカレ2部団体優勝も好作用し、近年では例をみない14人もの新入生が加入した。

女子　いかにして大会中止の低下を防いだか。常國萌々子主将（4年）は「試技会」の存在を挙げた。

関西学生の中止が決まった翌日、田原宏晃監督が選手に実施を告げた。西日本の大学トップクラスの本学の施設を使い、関西学生と同じ日に本番さながらの環境で演技する。動画を撮影し家族や保護者が視聴できるようにした。

常國は「中止で選手のやる気がいったん下がりかけたが、試技会に向けて試合のように緊張感を保つことができた」と振り返る。

全日本学生選手権は2年前、2部に降格。昨年はコロナ禍の影響で1、2部の入れ替えが見送られた。

チームは、4月の全日本個人総合選手権にも出場した新人の北田絢女（1年）、北川莉奈（1年）、吉田菜々花（2年）、副主将の魚井光（3年）ら全体の雰囲気は明るく、メリハリのある練習ができているという。

常國自身は昨年12月、痛めていた左肩を手術し、まだ60％程度の復調度だというが、「インカレでは絶対2部で優勝し、1部に上がりたい」と宣言。日々の練習で調子が悪かった後輩に声をかけるなどチームの雰囲気作りに取り組んでいる。

常國萌々子主将（4年）

上山剣童主将（4年）

U－18に選出されているオールラウンダーの田部壮一郎、得意の鉄棒ではインターハイの代替試合で優勝経験を持つ上田遥介、体線をいかしたきれいな体操が魅力の伊藤颯良ら地力のある新人が加わった。

昨年度全日本インカレで2部個人総合、あん馬種目別で優勝している近江奎太（2年）をはじめ、チームの中心となる副主将、藤島央基（3年）や上山主将ら上級生は、有望新人の加入で刺激を受けた。上山は「団体のメンバー候補が多数いてみんなでその座を狙う活気のある状況ができている」と話す。

チームは、9月のインカレ2部での団体総合優勝と、社会人、学生、高校生のトップが集い、日本一を決める全日本団体選手権の出場権獲得が目標だ。

上山は「チームのモチベーションを維持するために、練習では本番さながらの声かけをして、1人1人の練習をチーム全体で見守っていく」と話している。

【競技記録】

アメリカンフットボール

◆関西学生リーグ・2021年春シーズン
大阪体育大学13－29神戸学院大学
大阪体育大学7－26大阪経済大学
大阪体育大学10－14桃山学院大学
大阪体育大学28－0大阪市立大学

ソフトボール

◆全日本大学選手権大会近畿予選
【女子】
大阪体育大学5－3大阪青山大学
大阪体育大学0－5大成学院大学

◆春季関西学生リーグ
【女子】
大阪体育大学5－4大阪大谷大学
大阪体育大学5－3羽衣国際大学
大阪体育大学0－7同志社大学
大阪体育大学3－5立命館大学

テニス

◆関西学生春季トーナメント（本戦）
【男子】
▽シングルス　8強進出　前田将吾▽16強進出　北昇馬▽32強進出　渡邊太一、村口皓亮
▽ダブルス　8強進出　前田将吾・村口皓亮

ソフトテニス

◆関西学生シングルス選手権大会
【男子】
▽準々決勝　吉田亮介4－1立命館大学、三間悠生4－0大阪成蹊大学
▽準決勝　吉田4－3同志社大学、三間3－4同志社大学
▽決勝　吉田1－4同志社大学
【女子】
▽3回戦目　山村若菜3－1同志社女子大学、高木このみ3－0大阪樟蔭女子大学、川上茅紘0－3関西外国語大学、中西紗花0－3神戸松蔭女子学院大学
▽4回戦　山村4－3神戸松蔭女子学院大学、高木4－2千里金蘭大学
▽5回戦　高木1－4関西大学、山村1－4関西大学

◆大阪学生大学チーム対抗大会
【男子】
▽準々決勝　大阪体育大学A2－0大阪商業大学C、大阪体育大学C2－1関西外国語大学C
▽準決勝　大阪体育大学A1－2関西外国語大学B、大阪体育大学C0－2関西大学A
【女子】
▽1回戦目　大阪体育大学B0－3千里金蘭大学A
▽3回戦目　大阪体育大学A0－3大阪成蹊大学A

主将、語る。

バスケットボール

チーム一体 攻撃的に

女子 バスケットボール部女子は4月から7月にかけて行われた全関西女子学生バスケットボール選手権大会の決勝で大阪人間科学大学を68―60で降し、4年ぶりの優勝を果たした。奥村鈴主将（4年）は「優勝という結果を出せて自信につながった。次は学生日本一を目指す」と全日本大学選手権（インカレ）に照準を合わせている。

今年のチームのテーマは「オフェンスもディフェンスも攻撃的に」。具体的には1クオーターで30点、全4クオーターで120点取ることだ。従来は、ディフェンスに重点を置いた試合運びを目指してきたが、奥村は「どれだけディフェンスを強化しても、それだけでは関東の強豪には立ち向かえない。昨年から方針を転換した」と話す。

全関西の初戦は、京都先端科学大学に142―56。奥村は「初戦の割には思い切り攻めることができたと思う」。次いで、関西外国語大学に75―50、関西学院大学に73―56で勝ち、決勝に進んだ。

相手の大阪人間科学大学には昨年11月、秋季リーグの代替として行われた関西女子学生交流大会の決勝で71―90で敗れている。全関西も第2クオーターまで、14―18、16―18と劣勢。なかなか攻撃できずシュート回数は相手より少なかったのだという。

高橋侑也主将（4年）は「昨年は4年生の実力が高く、下の学年が4年生からの意見を待つなど、上に頼っていた。まとまりに欠ける部分があった」と反省。今年については「ずば抜けた選手がいない分、上級生、下級生の意見交換やコミュニケーションが増えている」と話す。

関西学生選手権では4年生の欠場を受け、請田祐哉（3年）、仲田泰利（2年）、下田平翔（2年）が出場した。高橋は「試合を経験したことで、場面場面の判断力がついた」と期待する。請田らが苦い経験を糧に成長を遂げれば、チームとして大きな上積みになる。

秋季リーグでは5位以内に入ると、インカレの出場権を得る。高橋は「目標のインカレ出場を果たすために、上級生、下級生一体となったチームを作り上げたい」。勝負の秋に向けてチーム内で切磋琢磨する日々が続く。

高橋侑也主将（4年）

奥村鈴主将（4年）

男子 バスケットボール部男子は関西学生バスケットボール選手権の初戦で、立命館大学に66―72で敗れた。

痛かったのはコロナ禍による日程変更だ。大会が4月下旬から6月に変わったため、4年生のアデバンジョ・ウィリアム、原勇気、中原啓太ら主力が教育実習のため、不参加となった。

チームのコンセプトは「ディフェンス・リバウンド・ファーストブレイク」。ディフェンス自体はある程度できていたというが、リバウンドは立命館大学の高さに阻まれた。第3クオーター途中までリードしていたが、その後、逆転され、試合経験の少なさが響いた面もあった。

チームは2年前、関西学生秋季リーグで5位に入って全日本大学選手権に進んだが、昨年は秋季リーグ10位に終わり、インカレ出場を逃した。比嘉靖監督によると、メンバーがある程度固定され、日々の練習での競争が不足していた。

バレーボール

バレーボール部女子にとって、モチベーションの維持が難しい春になった。男子女子とも関西大学春季リーグで白星発進し、「さあこれから」という段階で、新型コロナウイルス感染症のためにリーグは中断した。仕切り直してモチベーションを高め、秋のリーグ戦に挑む。

架谷也斗主将（4年）

男子 バレーボール部男子は4月18日、本学であった関西大学春季リーグの初戦で、大阪国際大学に3―0で快勝。しかし、その1試合限りで春季リーグは中止が決定し、公式戦から遠ざかる。架谷（はさたに）也斗主将（4年）は「中止は、予想はしていた。仕方ないと思うが、やはり正直言うと悔しい」と残念がった。

今季はチャンスの年だ。昨年の関西大学秋季リーグは、1部の開幕順位9位から快進撃し、4勝1敗で「40年ぶり」（浅井正仁監督）というリーグ2位となった。

しかし、全日本男子大学選手権（インカレ）では、岐阜協立大学に0―3のストレート負け。架谷は「久しぶりに2位になった矗っ柱をインカレでへし折られ、それをバネに練習してきた。春季リーグで上まで行ける手ごたえがあった」と話す。

背中で引っ張るエースの架谷。硬軟織り交ぜて攻めるエースの宍戸勝憲（2年）。堅実なプレーが光るセンターの榮温輝（2年）。トリッキーなプレーができるセッター・土井蓮（4年）。昨秋の準優勝メンバーのほとんどが残り、インカレ初戦負けを糧にやるべき練習をきっちりこなし、チームの完成度は上がってきた。

チーム全体が手ごたえを感じていただけに、リーグ戦の中止で「何をモチベーションにしたらいいのか分からなくなった時期もあった」という。

それでも今、チームは秋季リーグでの優勝と、インカレでの打倒・関東勢を目標に一丸となっている。架谷は「コロナ禍で自主練ができない分、チームの集中力を高めるよう雰囲気づくりを心掛けている」。勝負の年。真価が問われる秋だ。

重親亜依主将（3年）

女子 バレーボール部女子は4月、関西大学春季リーグの初戦で兵庫大学に3―0で快勝。2年ぶりの1部リーグ昇格に向けて好スタートを切ったが、リーグ戦は1試合だけで中止。重親亜依主将（3年）は「リーグ優勝を目指してやってきた。その目標がなくなった」と落胆したという。

2年前の秋季リーグで2部降格。コロナ禍の昨年、春季リーグは中止になった。

チームの目標は秋季リーグ優勝と入れ替え戦の勝利だ。チームはライトからスピードある攻撃をみせる重親や、長身サイドの権藤真実（2年）、赤澤優花（2年）、長身で攻撃的なセッターの坂本千愛（2年）らが軸。1年のミドル、山本千尋も期待の新戦力。全体の身長は高くはないが、しっかりつなぐコンビバレーを展開する。重親は「自分たちのベストを出せば、目標実現の可能性は十分ある」と話す。

春季リーグで士気はいったん下がったというが、その後、全員のミーティングで「秋季リーグで絶対1部に上がるという意識を持つ」「そのために練習中は、厳しく声を掛け合う」ということを徹底した。普段は面倒見の良い主将だが、自ら練習中は後輩らに厳しく接する。

4年生部員が少ない事情もあり、3年生ながら主将を務める。「4年生が『任せた』と言ってくれた。自分がやるしかない」。自分のプレーを高めるよりもチームをまとめるのを優先すると言う一方で、「後輩には負けられない」とも。主将としての重責と意地を胸に、チームを引っ張る。

バドミントン

バドミントン部は4月23日の関西学生春季リーグで、男子は大阪経済大学に3―2で、女子は滋賀短期大学に3―2で勝利。しかし、コロナ禍のため、リーグ戦はその1日だけで中止に。現在は、8月の西日本学生選手権、秋の関西学生秋季リーグ、インカレに向けて日々の練習に励む。

畑野真輝主将（3年）

男子 男子は2019年春、31年ぶりに1部リーグへの昇格を果たし、25年ぶりに団体でインカレに出場した。秋のリーグ戦で2部に降格し、再昇格をかけた大切な2020年は、コロナでリーグ戦は中断。現在、2部1位のままだ。

2年の名田慎二郎が3月の大阪学生選手権のシングルスAで優勝するなど好成績を収め、上級生を含めてチーム全体が刺激を受け、活性化してきた。

畑野真輝主将（3年）は「秋のリーグで何としても1部に昇格する。またインカレはダブルスはこの数年出場できているが、今年はシングルスの出場も果たしたい」と力を込めた。

新美杏果主将（3年）

女子 女子は現在、2部3位。新美杏果主将（3年）は、「1部昇格とインカレ出場を狙う」と語る。

2年前は1、2年の「若手」がチームの主力としてプレー。コロナ禍の1年の空白を経て、今年はその「若手」が上級生となり、試合経験が豊富な点が強みだ。

新美は「まだ、レベルの高い相手と対戦した時、ラリーの中でミスが出てしまう。いかに我慢できるかが、1部昇格のカギだと思う」と分析。コロナ禍で人数制限など練習に制約がある中で、主将として積極的に声をかけるなど、集中力を高める雰囲気作りに努めている。

目指すは頂点

剣道

主将、語る。

本田和主将（4年）

女子　剣道部女子は6月の関西女子学生剣道選手権大会（個人戦）で、本田和（のどか）主将（4年）が初優勝を果たした。福井貞穂選手（3年）も3位。本田は「入学した時から関西優勝と全日本優勝が目標だった。その一つを達成でき、うれしい」と振り返る。

本田にとって、優勝のポイントになったのは、3戦目。勝てば全日本女子学生剣道選手権の出場が決まる場面で、全日本選手権の出場経験もある強豪の選手と対戦し、延長の末にメンを決めた。決勝は全日本選手権の出場経験もある強豪に裏面を決めた。

本田、福井は全日本女子学生剣道選手権の出場を決めたが、大会はコロナ禍で中止となった。

剣道部女子は、9月にある関西女子学生剣道優勝大会に向け、日々の稽古に取り組む。本田は「団体戦はチームの横のつながりが重要。まだ、先輩への遠慮が感じられることがあるので、より強い信頼関係を築いていきたい」と話す。

1年から学年リーダーを務め、「主将になりたい」と願い、稽古を積んできた。「主将として、後輩の姿をしっかり観察して、いつでもアドバイスできるように努めている。私自身が一つ一つの稽古を思い切ってこなして自分の姿を見せることで、後輩がついてくるようにしたい」と意気込む。

チームは昨年、コロナ禍で公式戦をまったく経験できずに卒業する先輩を悲しい思いで見送った。その分、今年はチームに試合で勝ちたいという意欲が満ちているという。

伊﨑理倫主将（4年）

男子　剣道部男子は、6月の関西学生剣道選手権大会（個人戦）で熊亮祐（3年）のベスト8が最高成績だった。

伊﨑理倫主将（4年）は「目標に届かず悔しい思いをした選手が多い。団体戦に向けて頑張ろうという思いを強めた大会になった」と語る。

その雪辱の場、関西学生剣道優勝大会（団体戦）に向け、日々の稽古に熱が帯びている。

コロナ禍の影響で、以前は全員参加だった稽古はA、Bチームの2つに分かれた。毎日あった稽古は週4～5回となり、稽古がない日は各自が筋力トレーニングなどに取り組む。

伊﨑は主将としてチームの半数としか稽古できないもどかしさを感じるといい、副主将2人と情報共有しながら部員の状態の把握に努めている。

主将として心がけているのは、「先輩が築いてきた部の伝統を、コロナ禍でも決して崩さないこと」。その伝統とは「強さだけを求めるのではなく品格を重んじる」。神﨑浩総監督、村上雷多監督らから学んだ。村上監督は今年3月の全日本選手権大会で準優勝。伊﨑は「全部員が村上先生を目指して稽古している」と話す。

2年前、関西学生優勝大会で優勝した。昨年はコロナ禍で開かれず、ディフェンディングチャンピオンの立場で臨む。全日本学生優勝大会も2年前はベスト16に進んでいる。伊﨑は「関西学生で優勝し、全日本も頂点を目指す」と力を込めた。

ザ・少数精鋭

なぎなた

井口晴奈主将（4年）

なぎなた部は7月4日に行われた第40回関西学生選手権大会の演技競技、個人競技で優勝した。

技の正確さを競う演技競技の有段の部では、阿部真優（2年）・井口晴奈（4年）チームが優勝。山下楓香（4年）・赤堀桃子（4年）チームが2位となった。防具を付けた試合形式の個人競技でも、二・三段の部で志藤すず穂（4年）が優勝。初段の部では河野葵（1年）が3位に。少数精鋭の部員6名全員が入賞する結果となり、井口主将は「部員全員が賞状をつかんだのは初めて」と振り返る。

なぎなた部は2年前、全日本学生選手権（インカレ）の演技競技で3連覇を果たした強豪だ。しかし、昨年はコロナ禍のためインカレは中止に。井口は中止の決定を、稽古ができずに帰省していた奈良県の実家で、天川彰子監督からオンラインで知らされた。「先輩と試合に出る機会もなくなり、悔しかった」という。

先輩がつないだ連覇を継続する場のインカレは8月に迫っている。チームの目標は、演技競技での4連覇は当然だが、近年、頂点から遠ざかっている試合形式の団体戦の優勝だ。関西学生選手権での阿部・井口チーム、個人の志藤の優勝はいい弾みとなった。

日々の稽古はコロナ禍の影響で自主練習ができないなど制約があるが、部では短時間の稽古に集中するため、家で各自ができることをし、稽古はそれを試す場という意識を共有している。鏡の前でなぎなたを持つ。自分の動画や先輩の動画を見て修正する。イメージトレーニング――。

井口は「インカレの団体で優勝するには、1本の重みが重要。1本につながる打突がまだ課題」。団体優勝目指し、チーム一丸で突き進む。

柔道

毎日、真剣勝負

柔道部は男女とも5月の関西学生・学生女子柔道優勝大会では満足のいく結果は残せなかった。個人戦で行われる8月の関西学生・学生女子体重別選手権大会に向け、稽古に熱が帯びている。

男子　「まだ、個々の選手に甘い部分が残る。闘争心を鍛えていきたい」。本松要主将（4年）は力を込めた。

5月の関西学生柔道優勝大会。1部トーナメント1回戦は天理大学が棄権し不戦勝となったが、2回戦では近畿大学に0―7で敗戦。その後、関西大学にも敗れた。1部の7～8位決定戦で大阪産業大学を降して7位となり、2部2位の大阪教育大学に敗れて、2部降格が決まった。

次の目標は、8月の関西学生体重別選手権だ。個人戦だが、ベスト16以上の選手にはポイントが与えられ、その合計ポイントの関西上位10校には、10月に行われる団体戦の全日本学生柔道体重別団体優勝大会の出場権が与えられる。

昨年11月に主将に就任した本松は、新型コロナウイルスの影響がチームに影響を落としていると話す。昨年は練習自粛で、現2年生と上級生が顔を合わせてコミュニケーションを取る機会は秋までなかった。本松は1年だけでなく2年生ともコミュニケーションを深めて性格や技量を把握しなければならず、練習が終わった後も連れだってコンビニに行くなど後輩と一緒にいる機会を大切にしている。

稽古では、どちらかがポイントを取るまで続ける稽古を重視。試合に近い練習で、チームの闘争心を高めることに主眼を置いている。

女子　5月の関西学生女子柔道優勝大会では、1回戦で明治国際医療大学に0―3で敗れた。次の節目の試合は、8月の関西学生女子体重別選手権。辻彩果主将（4年）は「次は個人戦。1人1人がパフォーマンスを上げられるよう工夫していきたい」と話す。

少人数だが、明るい性格の選手が多いという柔道部女子。チームの今季の目標は10月の全日本学生女子柔道体重別団体優勝大会への出場だ。

通常は6月にある全日本学生女子柔道優勝大会の成績で出場が決まっていたが、新型コロナウイルス感染症の拡大で秋以降に延期されたため、関西学生女子体重別選手権での獲得ポイント次第で出場が決まることになった。

辻は「チームには昨年に比べて重量級の選手も増えたが、各階級でどうポイントを獲得していくかが課題」と気を引き締める。

「全日本学生女子柔道体重別団体優勝大会はこれまでも出場している。出場を継続して、全国の舞台に食らいついていきたい」。8月の個人戦に向けて、いかに個々が仕上がっていけるか。真剣勝負の稽古が続けられている。

行くぞ全国!!

水上競技

水上競技部が練習する第6体育館公認屋内プール

水上競技部は、7月に行われた関西学生・女子学生選手権水泳競技大会で、男女で金2個、銀3個、銅6個の計11個のメダルを獲得した。総合得点で男子は3位、女子は4位となり、ともに10月の日本学生選手権水泳競技大会への団体出場権を獲得した。

男子はメダル5個。須古井大輝（4年）が200㍍平泳ぎで優勝し、100㍍平泳ぎでも3位。400㍍メドレーリレーも3位に入った。

尾関一将・水上競技部男子監督は「新型コロナウイルスの影響で試合経験が積めていないため、レース展開を失敗する選手や、仕上がりが良くない選手が多かった。その中で4年生を中心に上級生がチームをけん引する泳ぎを見せた。しっかりと調整できればインカレでは順位を上げていけると思う」と話す。

関西選手権はインカレにつながる重要な大会だ。須古井は「タイムを度外視して優勝にこだわった。タイムはインカレで納得のいくものを出せたら」と振り返る。

400㍍メドレーリレーで3位に入った主将の市川舜明（4年）は「4人中3人が初メンバーで慣れない部分はあったが、全員がベストパフォーマンスを発揮すればインカレでも通用するはず。決勝進出を狙う」とインカレでの活躍を宣言した。

一方、女子は金1個、銀2個、銅3個。枡井萌は、1年生ながら200㍍個人メドレーを自己ベストの2分18秒68で制し、400㍍個人メドレーでも2位。「バタフライから背泳ぎにかけてタイムが落ちるのが弱点だったが、改善できて予想外のタイムを出せた。インカレで決勝に残ることが目標。大体大に貢献したい」とフレッシュな笑顔で優勝を喜んでいた。

また、50㍍自由形は2位の新山くるみ（3年）、3位の河岸凛子（3年）の2人が表彰台に。400㍍フリーリレーでも3位と健闘した。

女子200㍍個人メドレー優勝の枡井萌（1年）

男子200㍍平泳ぎ優勝の須古井大輝（4年）

3位となった女子400㍍フリーリレーの新山（3年）、青山（2年）、河岸（3年）、谷向（4年）＝左から

3位となった男子400㍍メドレーリレーの辻本（1年）、須古井（4年）、春岡（4年）、市川（4年）＝左から

◆関西学生・女子学生選手権水泳競技大会（7月23～25日、大阪市＝3位以内）

【男子】
▽1500㍍自由形　③岸田晃祐（4年）15分55秒92
▽100㍍平泳ぎ　③須古井大輝（4年）1分1秒98
▽200㍍平泳ぎ　①須古井大輝2分13秒58
▽100㍍バタフライ　②春岡草太（4年）54秒38
▽400㍍メドレーリレー　③大体大（辻本瑞樹、須古井大輝、春岡草太、市川舜明）3分43秒02

【女子】
▽50㍍自由形　②新山くるみ（3年）26秒55③河岸凛子（3年）26秒63
▽200㍍バタフライ　③新井はる佳（2年）2分18秒13
▽200㍍個人メドレー　①枡井萌（1年）2分18秒68
▽400㍍個人メドレー　②枡井萌4分55秒14
▽400㍍フリーリレー　③大体大（新山くるみ、青山美咲、河岸凛子、谷向花梨）3分52秒40

市川舜明主将（4年）

石田桃稼主将（4年）

ハンドボール

ハンドボール部は東京2020オリンピックの日本代表に、女子が6名、男子は1名の卒業生を送り込み、日本のハンドボール界を支える存在だ。昨年はコロナ禍でインカレが中止に。今年は高い志で頂点を狙う。

キャプテンが引っ張らないといけないチームじゃない

弓削春風主将

女子　今年は関西学生春季リーグがコロナ禍のため、昨年に続き中止に。西日本インカレ出場チームを決める「出場&シード権決定戦」が春以降の初試合となった。

弓削春風主将（3年）は「12月の日本選手権から試合がまったくなく、試合勘をつけるのが一番の目的だった」という。初戦の立命館大学戦は45―22と大差はついたが、久しぶりの試合の緊張感からミスもあったという。続く関西福祉科学大学戦も34―12だったが、前半にミスが目立った。しかし決勝の武庫川女子大学戦でディフェンスを固め速攻につなげる本来の試合ができ、35―21で優勝できたという。

2年前、全日本学生選手権（インカレ）で前人未到の7連覇。8連覇を目指した昨年、インカレはコロナ禍で中止になったが、相澤菜月主将（現北國銀行）が「それなら、日本選手権を取りに行こう」と前向きにチームを盛り上げ、日本選手権で2年連続準優勝を果たした。

相澤、中山佳穂（現北國銀行）ら層が厚かった4年生が引退。その後、チーム全員で決めた目標は「インカレ優勝と、日本選手権4強」だ。昨年までは4年生が主力だったが、弓削は「卒業した先輩とはキャリアが違う。上級生、下級生が一体になったチーム作りが必要」と話す。その実現のために、コート内では先輩、後輩の差をなくす雰囲気作りに努めている。

先輩が築いたインカレ連覇をつなぐ責任。弓削は「危機感があると、『8』へのプレッシャーを語る。それでも、主将としてチームを引っ張らねば、という気負いはない。チーム全員が試合に出ている者も出ていない者も、それぞれの位置から声を出しているからだ。

「キャプテンが引っ張らないといけないチームじゃない」。偉業を続けるチームのプライドを感じさせた。

チームのすべてを変えるくらいのつもりで

坂本好誠主将

男子　2018年に全日本学生選手権を制した男子。翌19年は8位に沈み、頂点奪還を目指した昨年、コロナ禍ですべての公式戦が中止になった。坂本好誠主将（4年）は「1回生の時の優勝の光景は脳裏に焼き付いている。後輩にその光景を見せたい」と意気込む。

今年、関西学生春季リーグが中止された。練習試合もまったくなく、チームの士気は下がり、試合勘も鈍った。

その後、西日本インカレ出場チームを決める「出場&シード権決定戦」に出場。グループ戦は同志社大学に39―25、大阪経済大学に30―24、関西福祉科学大学に26―23、神戸国際大学に37―23で4連勝したが、1位決定戦は関西大学に28―31で敗れた。

坂本は、1位決定戦は教育実習で参加できずビデオで見たが、シュートミスが多く、相手に甘いディフェンスを突かれてゴールを決められるなど課題が残ったといい、第一延長の後半に点差を付けられた。

坂本はそれまでの日々の練習で試合のような緊張感が足りなかった点が、関西大学戦にも影響したという。その反省から、6人速攻をメニューに取り入れるなど試合をイメージした練習を心がけている。

先日、チーム全員で「今、ハンドボール部男子に足りないもの」を発表しあった。ディフェンスの連携、声かけ、キーパーとの意思疎通、接触プレー。あえて厳しいことを様々に言い合い、チームは目標の西日本インカレ優勝、全日本インカレ優勝に向けて修正、強化するべき点を確認し合った。坂本は「チームのすべてを変えるぐらいのつもりでやらないと、頂点は極められない」と話す。

卒業生の成田幸平（湧永製薬）が東京五輪に出場した。「成田さんは身近な存在で、いろいろ教えてもらった。自分たちも全力プレーでハンドボールの魅力を発信したい」と意気込んでいる。

陸上競技

やり投げ 武本紗栄 女王

力強く放たれたやりはグンと伸び、長い間目標にしてきた60mの壁を一気に超えていった。6月5日、日本学生陸上競技個人選手権大会が行われた神奈川県のレモンガススタジアム平塚。武本紗栄（4年）は女子やり投げで62m39の自己新記録をマークし、学生チャンピオンの座に就いた。続く6月25日の日本陸上競技選手権大会（大阪市・ヤンマースタジアム長居）でも3位で初の表彰台。一時期は伸び悩んだ逸材が今季、秘めた能力を大きく開花させた。

自己新記録　大会新記録　関西学生新記録

60m超

20階建てのビル相当

「このまま終わるんや…」からの「飛躍」

2021年度シーズン、武本は好調だった。

4月29日の織田幹雄記念国際陸上競技大会で、自己ベストの57㍍83をマークし、学生最高の2位に入った。

5月21日の関西学生陸上競技チャンピオンシップはあいにくの雨の中だったが、地力の違いを見せつけた。1投目はファウル。2投目で56㍍71を記録し、2位に7㍍以上の大差をつけた。

武本の目標は「60㍍超え」だった。今年3月末で退職した栗山佳也前陸上競技部部長から「60㍍は見えているぞ」と励まされてきた。練習では、助走のタイミングがうまく合わなくても腕の振り切りだけで57㍍前後が出ていて、後一歩のところだったという。

そして、6月5日、日本学生陸上競技個人選手権大会第2日。1投目は56㍍43、以後、2投目で57㍍29、4投目で57㍍97と徐々に記録を伸ばす。5投目。「思い切り投げた、と言うよりも、型にはまってタイミングで投げられた」と武本は振り返る。やりはグンと伸び、62㍍39の大会新記録。2位に5㍍以上の大差をつけ、関西学生記録も更新。自己ベストを一気に4㍍56も上回る。やりが芝に刺さった瞬間、両腕を高く突き上げて「素直にうれしい」と喜びを爆発させた。

その勢いで、6月25日の日本陸上競技選手権大会は最後の6投目で57㍍95をマークして3位。学生で唯一の表彰台に立った。

武本は市立尼崎高校3年生時にインターハイで優勝。本学1年時にアジアジュニア陸上競技選手権大会でも銀メダルを獲得した逸材だが、その後伸び悩んだ。「大学ではいろんな知識が増え、あれもやらなきゃ、これもやらなきゃって課題があふれ返った」と振り返る。

昨年2月に右足の親指を骨折。さらに新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、練習も難しくなった。しかし、そこで焦りから吹っ切れたという。「骨折で練習ができず落ち込んだが、周りの人もコロナのため練習できない。条件は同じ」と考えることができた。思い切り休むことでリフレッシュし、持ち味の腕の振り切りの強さを、重いメディシンボールで鍛えていった。

昨年は9月の日本学生陸上競技対校選手権大会で57㍍43で2位、10月の日本陸上競技選手権大会では55㍍66で7位入賞と復活を果たし、今シーズンにつなげた。

武本は「1、2年のころは結果が出ずに練習が嫌になったこともある。高校時代に負けたことがない同い年の選手にも負け、『紗栄はこのまま終わるんや』とも思った。それが3年生の時に抜け出せた」。挫折を経て逸材は心身とも大きく飛躍した。

陸上競技

関西学生チャンピオンシップで表彰台ラッシュ

陸上競技部は5月の関西学生陸上競技チャンピオンシップで7選手が優勝、2位4名、3位4名と次々に表彰台に上がった。6月の日本学生陸上競技個人選手権大会でも1位1名、2位1名のほか5名が入賞し、実業団も含めて日本一を争う日本陸上競技選手権大会でもシニアで4名（教職員含む）、U20でも4名が入賞した。

武本紗栄（4年）が女子やり投げで日本学生個人で優勝、日本選手権で3位と際立った成績を収めたが、トラックで光ったのが、男子400㍍の岩崎立来（3年）だ。関西学生を自己ベストの46秒64で制した。5月の静岡国際でも自己ベストで5位に入っており、勢いをつないで日本選手権でも7位入賞した。

これまでは400㍍を走り切る持久力を鍛える練習が中心だったが、「自分は他選手に比べてトップスピードが弱い」と反省、冬からスピード系の練習を増やし、貴嶋孝太短距離コーチからバイオメカニクスに基づいた知識を学んだ。また、静岡国際などトップの大会に出ることで「トップ選手は自分以上に前半から突っ込んでいる」ことを体感し、前半に抑える自分のくせを改めて好結果につながったのだという。

陸上競技部の中で、とりわけ層の厚さを誇るのが投てきだ。女子ハンマー投げでは、髙橋沙湖（大学院）が関西学生では最後に抜かれて2位となったが、日本学生個人で地力を発揮し、2位に。また、1年の大濱未結は関西学生で3位に入ると、日本学生で5位、日本選手権U20でも2位とグングン成長している。大体大の投てきチームの強さについて、髙橋は「種目が違ってもレベルが高い選手ばかり。刺激を受け、とても参考になる」と話す。

男子砲丸投げでは、下浦大輝（4年）が関西学生で15㍍72の自己ベストで快勝した。今季の好調の秘密を尋ねられると「昨年、コロナ禍の自粛中、（奈良県）山添村で祖父母と畑仕事をしている時にじいちゃんの体の使い方を見て、『力だけではだめ』ということに気づいた」と笑う。

女子砲丸投げは、山本佳奈（2年）と岩本真波（2年）が関西学生でワン・ツー。その後、岩本が日本学生個人で7位入賞すれば、山本も負けじと日本選手権U20で3位に入り、同級生が高いレベルで競い合う。女子円盤投げも中瀬綺音（2年）、渡部舞（3年）が1、2位となった。

跳躍でも、女子走り高跳びで和田真琉（3年）が関西学生で優勝し、日本学生個人でも8位入賞した。和田は七種競技でも関西学生で5位に食い込んだ。

また、短距離では、関西学生の4×100㍍リレーで、大体大は男子（青木、松下、萩尾、土手）が5位、女子（田渕、稲越、横山、川村）は6位に入り、層の厚さを感じさせた。

男子砲丸投げ・下浦大輝（4年）

女子ハンマー投げ・大濱未結（1年）

女子走り高跳び・和田真琉（3年）

女子砲丸投げ・山本佳奈（右）、岩本真波（ともに2年）

女子ハンマー投げ・髙橋沙湖（博士前期課程2年）

男子400㍍・岩崎立来（3年）

◆関西学生陸上競技チャンピオンシップ（5月20～23日、京都市＝3位以内）

【男子】▽400㍍ ①岩崎立来（3年）46秒64▽三段跳び ②丸山圭太（2年）15㍍10 ▽砲丸投げ ①下浦大輝（4年）15㍍72③前川純大（3年）14㍍69 ▽ハンマー投げ ③新崎匠真（3年）58㍍66 ▽やり投げ ①秦康太（3年）72㍍32

【女子】▽走り高跳び ①和田真琉（3年）1㍍69③森岡未優（1年）1㍍65 ▽砲丸投げ ①山本佳奈（2年）14㍍16②岩本真波（2年）14㍍09 ▽円盤投げ ①中瀬綺音（2年）44㍍24②渡部舞（3年）42㍍54 ▽ハンマー投げ ②髙橋沙湖（博士前期課程2年）55㍍86③大濱未結（1年）55㍍67 ▽やり投げ ①武本紗栄（4年）56㍍71

◆日本学生陸上競技個人選手権大会（6月4～6日、神奈川県平塚市ほか＝8位以内）

【男子】▽800㍍ ⑧津田竜太朗（3年）2分6秒22 ▽やり投げ ⑦片川志遥（4年）67㍍97

【女子】▽走り高跳び ⑧和田真琉1㍍65 ▽砲丸投げ ⑦岩本真波13㍍96 ▽ハンマー投げ ②髙橋沙湖55㍍46⑤大濱未結54㍍03 ▽やり投げ ①武本紗栄62㍍39

◆日本陸上競技選手権大会（6月24～27日、大阪市＝8位以内）

〈シニア〉

【男子】▽400㍍ ⑦岩崎立来46秒98 ▽やり投げ ⑦中西啄真（大体大T・C、体育学部助教）73㍍87

【女子】▽砲丸投げ ⑦山本遥（三観陸協、教育学部長補佐）14㍍32 ▽やり投げ ③武本紗栄57㍍95

〈U20〉

【男子】▽ハンマー投げ ⑥森下海（2年）63㍍23

【女子】▽砲丸投げ ③山本佳奈14㍍23 ▽ハンマー投げ ②大濱未結54㍍12⑦竹谷陸（2年）51㍍97